

はなく、日本的な宗教意識・宗教心理がどうしてこのようになつてきたかを説きほぐしてゆく。また、それぞれの国の仏教を日本の物差しで測ることは誤っているという。鈴木大拙と比較すれば明らかに西田のそれは視野が閉ざされている。仏教自身も自己否定を必要とする。そうでないと「娑婆が浄土を映し、浄土が娑婆を映す、明鏡相照らす」とはならない。それは「明鏡」であつても鏡に過ぎず、真の实在の像は失われてしまうのである。西田の「内在的超越」の一方だけの主張には疑問が残る。

パネルの主旨とまとめ

藤田 正勝

西田幾多郎は、その初期の思索から晩年に至るまで、宗教の問題に深い関心を寄せていた。たとえば『善の研究』では宗教は「哲学の終結」であると言われている。しかし、そのように言われるとき、「宗教」のもとに何が理解されていたのかは明らかではない。もちろん、一方では仏教やキリスト教への深い理解と共感が語られているが、しかし他方、そのような現実の宗教に対する根本的な批判もまた語られている。そして宗教のあるべきあり方についてさまざまな観点から語られている。本パネルでは、そのような仕方でも語られた西田の宗教理解の全体像を浮かび上がらせるとともに、それが有する意義と問題点と

を明らかにすることをめざした。

小坂国継は「西田幾多郎の宗教思想の特質」と題した提題において、西田幾多郎が生涯を通して探究したものが、自己とその根源、およびその関係であつたこと、そしてその関係が最終的には、絶対矛盾的自己同一の関係として、つまり、内在的なものが超越的であり、超越的なものが内在的であるという関係として捉えられたこと、その点でキェルケゴールの思想との近さが見てとれること、しかしそれにも拘わらず両者の間に相違が存在することを明らかにした。

浅見洋は「西田の宗教思想とキリスト教的終末論」と題した提題を行つたが、とりわけ「終末論」の概念に注目し、西田の理解が「現在」ないし「瞬間」の意味を強調する「現在の終末論」という性格をもつこと、それに対して現代のキリスト教では、終末が、将来する希望の出来事として語られていることを論じた。

井上克人は「西田哲学と禅仏教」と題した提題において、西田の禅理解が、一般に言われるように、臨済・白隠系統の禅よりも、むしろ荷沢神会や圭峯宗密ら荷沢宗の禅につながることに、それは、西田のなかに「超越的なもの」への志向があり、その内在と超越の論理の究明に関心が向けられていたことによることを論じた。

高坂史朗は「内在的超越の宗教観」という論題で、西田が、「内在的超越と超越的内在」の絶対矛盾的自己同一において宗教が成立すると考えていたこと、しかし「将来の宗教」は「内在的超越」の方向に見いだされうると考えていたことを明らかに

パネル

にした。同時に、そのように一方に力点を置くことに対して疑問を示した。

この四つの提題を受けて、コメンテータの森哲郎は、まず小坂に対して、「絶対無の自覚」の本来の意味は「逆対応」ではなく、むしろ自己が絶対無そのものであるという点にあるという主張に対する説明を求めた。浅見に対しては、西田の神理解が結局のところ「哲学者の神」であったという理解に対する説明を求めた。井上に対しては、臨済・白隠系統の禅には「超越」への志向がないのかどうかという質問を提出した。最後に高坂には東アジアの諸宗教との対比で西田の宗教観の特徴を明らかにすることを求めた。またフロアーからは、「体用相即」の問題や「絶対無」と「逆対応」との関係の問題などをめぐって質問が出された。

本パネルが果たした役割は、西田幾多郎の宗教理解の特質を、禅仏教やキリスト教、その他の東アジアの宗教との関わりといった多様な観点から明らかにした点にあると考える。さらにその特質をとりわけて「内在的超越」という概念で言い表しうることを、その点でキェルケゴールの思想との近さが存在することを明らかにしえた点なども、その成果に挙げることができよう。

近角常観とその時代

代表者・司会 岩田文昭
コメンテータ 島蘭 進

近代真宗の体験主義

——近角常観とその信徒たちの信仰——

碧海 寿 広

近代の真宗とは何であつたか。この問いに答えるためには、知識人の思想や専門家による教理学にばかり注目しては不十分であり、真宗の教えが個々人においていかに「生きられた」か、という実態を説明することが不可欠である。だが従来の研究は、真宗大谷派の近代的改革者である清澤満之や、戦後の「同朋会運動」に連なる偉人たちの生涯に関心を寄せる傾向が強く、そこに収まらない「生きられた」真宗の拡がりを見ていく意欲には乏しかった。例外として、「妙好人」に関する研究が庶民的な真宗受容の諸相を明らかにしてきたが、近世期と大差ない「妙好人」の性格ゆえに、近代性を問うには不足があった。

近角常観（一八七〇—一九四一）とその信徒たちによる宗教実践の意義を再考することは、この研究史上の欠損を補う上で非常に有益である。常観は近代の仏教者の中でも頭抜けた体験主義者であり、理屈や教学ではなく、各々の人間が自己の体験